46th
定期
演奏会

Allegro con spirito

P sotto voce

水星交響楽団

指揮　齊藤 栄一

オットリーノ・レスピーギ
交響詩「ローマの噴水」「ローマの松」

ヨハネス・ブラームス
交響曲第２番

すみだトリフォニーホール　大ホール
2012年4月8日［日］　13:30開演

ご挨拶

本日はお忙しい中、私ども水星交響楽団（略称：水響）の演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

さて、今回のプログラムは、前半に、イタリアを代表する作曲家レスピーギの出世作で通称「ローマ三部作」と呼ばれる交響詩から「ローマの噴水」「ローマの松」を、そして、後半には、皆さまよくご存じの 19 世紀ドイツの大作曲家ブラームスの交響曲第 2 番を演奏致します。レスピーギの 2 曲は水響にとっては初めての演目となりますが（もう一つの交響詩「ローマの祭」は、1997 年の第 21 回定期演奏会にて取り上げております）、ブラームスの 2 番は、1985 年 3 月 2 日の水響第 1 回演奏会でのメインプログラムで、それ以来の演奏となりますから、実に 27 年ぶりの再演です。

今でも水響の本拠地である東京・国立市の一橋大学兼松講堂で、大学を卒業したばかりの一橋大学管弦楽団若手ＯＢを中心に演奏されたわけですが、その頃はまず参加メンバーを集めるにも一苦労で、おそらく半分以上は現役の学生（筆者のその一人でした）だった記憶があります。当時、中心となって水響を立ち上げた方々に伺うと、オケ自体を継続してやっていこうという感じはあまりなかったそうで、それを考えると、よく 27 年も続いてきたものだと正直感じます。ちなみに、当時と今回、両方に参加しているメンバーを数えてみたら、指揮者の齊藤先生を含め約 15 名程度というところでしたが、仕事や家庭の雑事に追われつつ、環境自体変化するなかで結構いるなあと率直に思います。これも、この第 1 回演奏会のメインが、早春の兼松講堂で、まさに誕生の季節に相応しい温かな雰囲気をもったブラームス 2 番だったからではないかと感じられてなりません。

レスピーギの 2 曲も、非常に色彩感豊かで、大管弦楽の効果を最大限に発揮できる素晴らしいオーケストレーションを持った曲で、今回は、まさしく季節的にはぴったりなプログラムになったと自負しております。それではごゆっくりお楽しみください。

水星交響楽団運営委員長
植松　隆治

本日のプログラム

O・レスピーギ

交響詩「ローマの噴水」（約 16 分）

Ottorino Respighi　Fountains of Rome

交響詩「ローマの松」（約 20 分）

Ottorino Respighi　Pines of Rome

J・ブラームス

交響曲第 2 番（約 42 分）

Johannes Brahms　Symphony No. 2

指揮
齊藤　栄一
（さいとう　えいいち）

京都大学にて音楽学を、国際基督教大学大学院にて美術史学を研究。この間、指揮法を尾高忠明、田中一嘉、円光寺雅彦の各氏に師事。1981 年には京都大学交響楽団と 2 週間に渡り、ドイツ、オーストリアにて演奏旅行を行い、ザルツブルグ音楽祭などにて指揮。82 年には関西二期会室内オペラ・シリーズ第 9 回公演、ブリテン作曲「ねじの回転」（関西初演）の副指揮者を務める。

84 年に水星交響楽団の常任指揮者に就任。水星交響楽団、オルフ祝祭合唱団との共催で、佐多達枝振り付けのバレエ「カルミナ・ブラーナ」（95 年、東京文化会館）、「ダフニスとクロエ」（99 年、新宿文化センター）を指揮した。その後、「カルミナ・ブラーナ」のバレエ公演では、神奈川フィル、東京シティ・フィルも指揮している。2005 年には、同曲を含むオルフの「トリオンフィ」3 部作（4 台のピアノと打楽器）を指揮している。

明治学院大学文学部芸術学科教授。著書に「往還する視線 14－17 世紀ヨーロッパ絵画における視線の現象学」（近代文芸社）、「振っても書いてもしょせん酔狂」（水響興満新報社）がある。

水星交響楽団

1984 年に一橋大学管弦楽団の出身者を中心に結成。マーラー、ラヴェル、ストラヴィンスキー、ベートーヴェンなど時代を超えた名曲の熱気あふれる演奏に定評がある。ブラームスの交響曲第 2 番は 1985 年の第 1 回定期演奏会以来、27 年ぶりの再演になる。第 1 番は 95 年、第 3 番は 88 年、97 年、第 4 番は 86 年、2007 年の定期演奏会で取り上げている。

曲目紹介 1

オットリーノ・レスピーギ
交響詩『ローマの噴水』
交響詩『ローマの松』

Ottorino Respighi
Fontane di Roma
Pini di Roma

交響詩『ローマの噴水』（Fontane di Roma）

ボローニャからローマに引っ越してその風物に心を動かされたレスピーギは、1917 年にこの『ローマの噴水』を完成させます。しかしその初演は惨憺たるもので、落胆したレスピーギは総譜を引き出しにしまいこんでしまいます。その後、指揮者のアルトゥーロ・トスカニーニがこの作品を取り上げてから再評価され、レスピーギの名は一躍注目されるようになります。「夜明け」、「朝」、「真昼」、「黄昏」という特定の時間帯における 4 箇所の噴水を描いています。【以下、曲の紹介の最初の段落はレスピーギ自身の文章を訳したものです。】

第 1 部　夜明けのジュリア荘の噴水
（La fontana di Valle Giulia all'alba）

この交響詩の最初の曲はジュリア荘の噴水から霊感を受けたもので、ローマの日の出前の薄明りの中を家畜の一群が通り過ぎ、そして消えていく、のどかな田園風景を描いている。

ジュリア荘は、ローマ市内にあるボルゲーゼ公園（後述の『ローマの松』参照）の北西にある、教皇ユリウス（Julius）3 世の別荘として 1550 年頃に建てられました。

第 2 部　朝のトリトンの噴水
（La fontana del Tritone al mattino）

突然のホルンによる咆哮と全オーケストラの大音響で第 2 部が開始される。それはまるで、水の噴射の間で熱狂するダンスの中で駆け回り、追い駆けっこをしてごちゃごちゃになっているナーイアス（泉・せせらぎなどのニンフ）とトリトン（半人半魚）の群れを呼び集める、歓びに溢れた掛け声のよう。

名建築家ベルニーニが 1643 年に完成させた噴水、海神ネプチューンの息子トリトンがホラ貝を上に向けて水を噴き上げています。

第 3 部　真昼のトレヴィの噴水
（La fontana di Trevi al meriggio）

オーケストラのうねりに伴って厳粛な主題が現れる。これが真昼のトレヴィの噴水。厳粛な主題は木管から金管へ移り、勝利のファンファーレを装う。トランペットが鳴り響き、海馬に曳かれたネプチューンの馬車は、列をなしているセイレーン（半人半鳥の海の妖精）とトリトン達を従えて、キラキラ輝く水面を渡っていく。その後、行列は遠くから再び響くトランペットの微かな音の中を消えて見えなくなる。

映画『ローマの休日』でオードリー・ヘップバーン扮するアン王女がこの「トレヴィの噴水（泉）」を見つめてから美容院で髪を切る・・・言わずと知れた観光の名所です。中央に海神ネプチューン、左右に豊饒の女神ケレース、右に健康の女神サルースが配置され、足元には頭の海馬とそれを操るトリトンの彫刻があります。

第 4 部　黄昏のメディチ荘の噴水
（La fontana di Villa Medici al tramonto）

この曲は、悲しい主題で開始され、その主題は声を押し殺したような小鳥の囁きの上を漂う。郷愁に満ちた夕暮れのひと時。繰り返しゆったりと鳴る鐘の音、小鳥の囀り、木々のざわめきがあたりに立ち込め、すべては夜の静けさの中に穏やかに消えていく。

1576 年に権勢を誇るメディチ家が建設途中にあった土地と建物を購入して完成させた別荘。ボルゲーゼ公園に隣接しています。

図版（左から）
トリトンの噴水
トレヴィの噴水
『日没のメディチ荘の噴水』S. コロディ（1810-1892）

交響詩『ローマの松』（Pini di Roma）

1924 年にレスピーギが取り組んだこの曲は色彩てき豊かなオーケストレーションと古い音楽への憧憬が見事に融合された作品となっています。同年ローマで初演され、途中ブーイングが起こったものの、終曲での輝かしい金管の咆哮によって聴衆から大喝采を浴びました。レスピーギはこの曲について、「『ローマの噴水』では自然に接した印象を音によって再現しようと試みましたが、『ローマの松』では記憶や過去の情景を思い出すための出発点として自然を用いました。ローマの風景を極めて特徴的に支配している樹齢何百年もの松の木は、歴史上ローマで起こった様々な出来事の証人なのです。」と解説しています。

第 1 部　ボルゲーゼ荘の松
（I pini di Villa Borghese）

ボルゲーゼ荘の松の木立の間で子供たちが遊んでいる。彼らは輪になって踊ったり、兵隊ごっこで行進したり争ったりしていて、夕刻のツバメのように自分たちの叫び声にひどく興奮し、群れをなして行ったり来たりしている。すると突然、場面は変わって・・・

枢機卿シピオーネ・ボルゲーゼなる人物が 1605 年にボルゲーゼ荘と庭園をつくったのがボルゲーゼ公園の始まり。ジュリア荘などいくつかのヴィラを含むローマで２番目に広い公園です。この曲の冒頭の旋律は、彼の妻エルザが子供の頃ボルゲーゼ荘で歌っていたいくつかの民謡のうちのひとつを借用したとされています。

第 2 部　カタコンブ付近の松
（Pini presso una catacomba）

カタコンブへの入り口をかたどっている松がつくる暗がりが目の前に入る。その奥底から悲しげな聖歌の歌声が聞こえてくる。荘厳な讃美歌のように大気を彷徨って次第に神秘的に消えていく。

カタコンブはローマ時代に作られた地下墓地。最初ホルンでグレゴリオ聖歌の断片が静かに奏され、次いで讃美歌風の旋律がトランペットのソロで奏されます。やがて狭い音域を行き来する祈り声を暗示する音形が執拗に繰り返され次第に音楽は高潮していきます。

第 3 部　ジャニコロの松
（I pini del Gianicolo）

そよ風が大気を揺する。ジャニコロの松が満月の明るい光を浴びてその輪郭をくっきりと浮かび上がらせ、ナイチンゲール（夜鳴き鶯）が啼く。

ジャニコロは海抜 82 メートルのローマの丘。ローマ全体を一望の元に見渡せることで古くから詩人や画家たちが訪れました。ヤーヌスは双面（前後２つの顔を持つ）で出入り口と扉の神として知られ、英語の１月をいう January の語源（ヤーヌスの月）でもあります。なお、曲の最後にはナイチンゲールの鳴き声を録音したレコードをかける指示があります。現在はテープを使用したり、実際に鳥笛などを吹いたりします。

第 4 部　アッピア街道の松
（I pini della Via Appia）

霧のかかった夜明けのアッピア街道。一本松が不思議な光景を見守っている。音を殺した絶え間ないリズムのいつ終わるとも知れない足音。詩人は過去の栄光の幻を見る。トランペットが鳴り響き、新たに昇る太陽の輝きの中を執政官の軍隊が聖なる道（ウィア・サクラ）に向かって行進し、意気揚々とカンピドリオの丘に向かって登っていく。

アッピア街道は紀元前 312 年に建設が始まった最初のローマ街道。建設責任者だったアッピウス・クラウディウスの名に因んでいます。カンピドリオはローマの七丘のひとつで、ローマ神の最高神であったユピテル（ジュピター）などの神殿があり、現在もローマ市庁舎があります。

（Vn 宮川雅裕）

曲目紹介 2

J・ブラームス
交響曲 第２番

Johannes Brahms
Symphony No. 2

本日３曲目は喜びにあふれた名曲ブラームスの交響曲第２番です。

ブラームスは「暗黒から光明へ」の精神的闘争を現した交響曲第１番を２１年かけて完成させましたが、その後この交響曲第２番はなんとわずか４ヶ月で完成させました。その曲想は第１番とはまったく異なり、とてもあたたかく喜ばしい気分に溢れています。それはこの曲が書かれた土地にも関係しているのかもしれません。この交響曲は１８７７年に南オーストリアのヴェルター湖畔の静かな森につつまれたペルチャッハでの夏季休暇中に書かれました。どこか牧歌的で田園風景を思い浮かべられるような爽やかさは、自然の中でのんびりとリラックスしたブラームスの気分が表れているのかもしれませんね。

とはいえ、この交響曲に全く陰の部分がないかというとそういうわけではありません。平和な音楽の中で所々出てくる哀歌的なフレーズは、まるで寂しさ、切なさを知っているからこそその分喜びを噛み締めることができる、ということを音楽で体現しているように感じます。そんな心の平和、不安定さ、そして不安の先にある喜びを本日の演奏を通じてぜひ感じていただきたいと思います。

やっと春が訪れているであろう演奏会当日、この交響曲に溢れる喜びをメンバー、お客様皆さんで共有できましたら幸いです♪

＜第１楽章＞
Allegro non troppo 二長調　４分の３拍子

この楽章は「沈みゆく太陽が崇高で真剣な光を投じるたのしい風景」（クレッチマー）と表現され、全体に明るく喜ばしい雰囲気に溢れています。まず始めにチェロとコントラバスで D-C ♯ -D の動機が提示されますが、この動機はこの交響曲全体を支配していきますので注意して聴いているととても面白いと思います。そしてその基本動機に応えるようにホルンによって第一主題が示され木管もそれに応えていきます。そしてティンパニがかすかになり、トロンボーンの神秘的な音に導かれるように、ヴァイオリンの優しく平和な旋律が奏でられます。ブラームスがこの曲を書いたのは夏ですが、その温かい旋律は春の優しい温かさにも感じられ、４月のこの演奏会には本当にぴったりだなぁとしみじみ感じます。そんな平和な旋律は次第に木管との掛け合いになり、ヴィオラとチェロのどこか哀愁のただよう第二主題を導きます。その後弦の鋭い動きを経て、木管とヴァイオリンによって再び第二主題が現れ提示部は終了。展開部では基本動機である三音の動機を軸に弦と管、そして弦の間でも対位法がなされ、オケ全体で盛り上がりを見せていきます。しかしそれはただ攻撃的な盛り上がりではなく、どこか寂しさも感じさせるような心の動揺を表す盛り上がり。どこか安定しない雰囲気を醸しながら、再現部へ。対位法が駆使されながら再び第一主題・第二主題が奏でられます。

第一楽章の結尾に向かうパッセージはこの交響曲の中でも最も優れている部分といわれています。それはまるで夢の中にいるかのように幻想的な様相を醸し出しています。第一主題が合奏でにぎやかにでたあとにホルンの独奏。やがて弦のピッチカートに管のスタッカートが応え、木管が基本動機に基づくフレーズを示しながら、だんだん弱くなり曲は終息へと向います。

＜第２楽章＞
Adagio non troppo ロ長調　４分の４拍子

この楽章は、第１楽章からは一変、まるで第１楽章での喜ばしさに疑問をもつかのように、もの悲しくせつない雰囲気に満ちています。しかしそれは全面に出されたせつなさではなく、表面には出さずに胸の奥に

深く沈んだ寂しさであり、それは一層心に迫ってくるものがあります。

曲はまずチェロによる物憂げな主題に始まり、そこにファゴットの上昇的な旋律が対位法としてついていきます。その主題はやがてヴァイオリンとフルートに移っていき、ホルンの孤独な旋律へ。この旋律はオーボエ、再びフルート、チェロへとつながっていきます。その後木管の可愛らしい第二主題が出てきますが、それもつかの間静かな情熱が高まっていくかのように、木管と高弦、低弦が絡みあい、曲は激しさを増していきます。その後も落ち着きを見せたかと思えば、また高まり、という不安定さを繰り返しながら、最後には第一主題が木管により少し現され、曲は静かに終わっていきます。

< 第３楽章 >

Allegretto grazioso（Quasi andantino）
ト長調　４分の３拍子

第２楽章で寂しさに沈んだ雰囲気から、はたまた一変し、第３楽章は無邪気で楽しい雰囲気に。

形式がはっきりしており、旋律が親しみやすいことからこの楽章は特に初演当時から人気があったといいます。曲は軽やかなチェロのピッチカートを伴奏にしたオーボエの牧歌的な旋律で始まりますが、しばらくすると急に４分の２拍子で速度が速くなり、弦と木管のスピード感ある対話が繰り広げられます。そしてその後またゆっくりオーボエが出てくる、と２つの場面が交互にめまぐるしく展開されていきます。場面が変わるように拍子、速さが変わっていったり、急に静かになったりと強弱の変化も激しく、とても遊び心のある一曲です。そしてこの可愛らしい楽しさは第４楽章の喜び、歓呼へとつながっていきます。

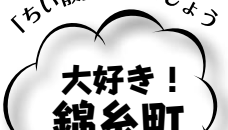
< 第４楽章 >

Allegro con spirito ニ長調　２分の２拍子

第１楽章の平和から第２楽章の不安、寂しさを乗り越えて第３楽章で無邪気に楽しくなってきたブラームスはそれだけでは満足できず第４楽章では存分に歓呼していきます。

曲は弦の Sotto　voce で少し緊張を帯びて始まります。この第一主題は第１楽章の三音動機に基づくものでありこの最終楽章も支配していきます。そしてこの第一主題に管も加わり、やがて音が消えていくかと思うと、急に強いオーケストラ全体の合奏が始まり、歓呼の響きとなっていきます。しかしそれもやがて静まり、ヴァイオリンとヴィオラによって第二主題が穏やかに奏でられます。この力強い歓呼と穏やかな喜びのコントラストがこの楽章に色みをもたせています。

そしてしばらくすると、第一主題が再び登場し、再現部が始まったのかと一瞬感じますが、やがて主題が姿を変え展開部へと移っていきます。展開部ではまたもや闇が顔をのぞかせ、低弦と木管が短調で対話を繰り返します。そしてまた急に静かになりまどろみのような美しく、不思議な感覚へと導かれ、やがて再現部の第一主題へ。再現部は提示部よりも更に喜びに満ちているかのように進んでいき、一度静かに管がたわむれたかと思うと更に激しさを増していきます。そして終わりに向かってはトロンボーンによって第二主題が力強く奏でられ、大歓呼の中でにぎやかに終結します。　（Vc 首藤ひかり）

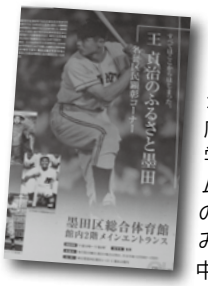


皆さん！最近歩いてますかぁ？散歩っていいですよ！そんなわけで終演後のひととき、錦糸町を「ちい散歩」してみませんか！

まずは、お花見に行きましょう！錦糸町駅そばには「錦糸公園」があります。そこにはシダレザクラやソメイヨシノなど 100 本以上。改修工事が終わり、名物の噴水もリニューアルされました。きょうの「ローマの噴水」を思い出しながら堪能してくださいね。

園内の墨田区総合体育館には、名誉区民でもある世界のホームラン王・王貞治さんの顕彰コーナーがあります。

隣の野球場では、中学時代の王少年が「ピンポン玉ホームラン」を連発していたとか。展示コーナーは、「僕は、ひ弱な赤ん坊だった」「活躍のご褒美はカツライスだった」といった生涯の各時期に分けられ、生家の中華料理店「五十番」で使われていたどんぶり、中学時代の皆勤賞の賞状、現役時代のユニホームなど貴重な品々がぎっしり！その上、区内の「ゆかりの地」マップもあるのです。見てみると、「気力」と書かれた石碑のある本所中学校、一本足打法生みの親・荒川博コーチとの出会いの場など、どこも心引かれる所ばかり！「日を改めて出かけてよう」と思いました。



また、近くのスポーツ選手ゆかりの地としては、大仁田厚選手らと数々のデスマッチを繰り広げたプロレスラー松永光弘選手のステーキ店「ミスターデンジャー」があります。

（祐成←今回はヴィオラ）

水星交響楽団

◇指揮者
齊藤　栄一

◇コンサートミストレス
中里　咲子

◇第１ヴァイオリン
生駒　陽子
伊東　陽子
上村　剛正
亀井　亮子
川野　圓
川原　ひかり
鈴木　尚志
鈴木　美沙
滝澤　蘭
中井　大貴
○中里　咲子
中谷　華子
西沢　洋
野村　国康
宮川　雅裕
山本　裕子
米嶋　龍昌

◇第２ヴァイオリン
伊藤　藍子
奥野　大志
織井　奈津乃
黒川　夏実
小山　吉智
小林　美佳
佐藤　千恵
鈴木　真由子
○土屋　和隆
徳地　伸保
永井　翠
原藤　結香
福島　秀哉
本田　愛子
前田　啓

◇ヴィオラ
有井　晶
○井上　拓
川野　圓
川俣　英男
木村　納
祐成　秀樹
鈴木　陽太
古屋　圭織
水上　久美
水野　未宙也
柳沢　成俊

◇チェロ
伊澤　雅子
伊藤　みなみ
今村　文子
大川　凌弥
金澤　直人
北岡　正英
首藤　ひかり
橘　温子
○東郷　丞
中山　憲一
能岡　雅人

◇コントラバス
阿部　洋介
大西　功
金子　千春
刈田　淳司
北畠　麻由
高橋　真弓
中川　彗音
○福原　祥公
増田　晴夫

◇フルート
西村　かよ子
本田　洋二
村上　芳明
横田　慎吾

◇オーボエ
齋藤　暁彦
野口　秀樹
長谷川　実里
山下　芙由子

◇クラリネット
賀内　洋介
西村　伸吾
藤原　誠明
横地　篤志

◇ファゴット
金谷　蔵人
冨井　一夫
永田　工
長谷川　美奈

◇ホルン
伊集院　正宗
井上　清駿
倉矢　忠和
小作　愛
島　啓
杉本　裕宣
山形　尚世

◇トランペット
淺田　健二
岩瀬　世彦
金子　恭江
大聖寺　将史
細川　紗耶香
八坂　葉子

◇トロンボーン
小笠原　剛
小林　威之
桜井　統
佐々木　英王
佐藤　幸宏
高橋　康昭

◇チューバ
植松　隆治

◇パーカッション
鈴木　海里
高橋　淳
椿　康太郎
中崎　裕子
山本　勲

◇チェレスタ
山形　リサ

◇オルガン
冨田　真希

◇ピアノ
高尾　麻衣子

◇ハープ
東森　真紀子
矢澤　みさ子

水響運営委員会

◇運営委員長
植松　隆治

◇コンサートミストレス
中里　咲子

◇パートリーダー
フルート
村上　芳明
オーボエ
齋藤　暁彦
クラリネット
賀内　洋介
ファゴット
冨井　一夫
ホルン
島　啓
トランペット
岩瀬　世彦
トロンボーン
佐藤　幸宏
パーカッション
椿　康太郎
第１バイオリン
中里　咲子
第２バイオリン
土屋　和隆
ビオラ
川俣　英男
チェロ
東郷　丞
コントラバス
刈田　淳司

◇インスペクター
中弦
川俣　英男
低弦
刈田　淳司
木管
横地　篤志
金管
佐藤　幸宏
打楽器
山本　勲

◇会計
今村　文子
金子　恭江
黒川　夏実
島　啓

◇楽譜
伊集院　正宗
高橋　康昭
野口　秀樹
宮川　雅裕

◇運搬
刈田　淳司
山本　勲

◇会場
横地　篤志

◇広報
川原　ひかり
佐藤　幸宏
祐成　秀樹
鈴木　牧
野村　国康
本田　愛子

◇チケット
進藤　彩
横田　慎吾

◇レセプション
川原　ひかり
首藤　ひかり

◇会場受付
岡本　真哉

◇ホームページ
川俣　英男

◇合宿
椿　康太郎

水星交響楽団第 47 回定期演奏会

日　時：2012/10/21（日）　13 時 00 分開場　13 時 30 分開演（予定）
会　場：すみだトリフォニーホール
曲　目：ラヴェル：スペイン狂詩曲
　　マーラー：交響曲第６番